

若年層を中心に高まる日本型雇用慣行の評価

—第6回勤労生活に関する調査

調査・解析部

○歳代八九・八％、七〇歳以上八八・七％)で、若干割合が高くなっているものの、すべての年齢階層で八割を超

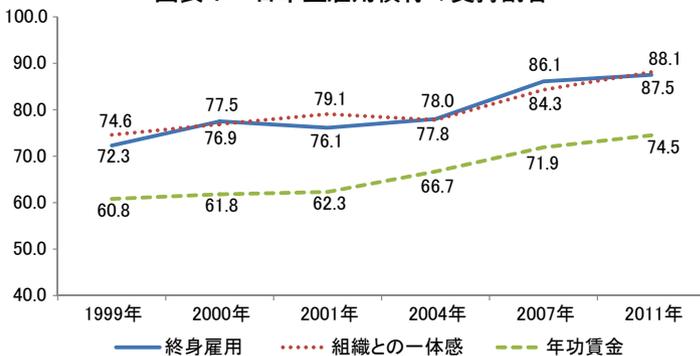
低迷する経済環境を背景に、雇用や労働条件をめぐる将来的な不透明感が増すなか、若年層を中心に、「終身雇用」などいわゆる日本型雇用慣行に対する支持が高まっている——こんな調査結果が当機構の「第六回勤労生活に関する調査」でわかった。調査は、勤労生活に関する意識を把握するため、終身雇用や年功賃金などの日本型雇用慣行や将来のキャリアなど職業生活についての意識とともに、生活満足度や社会のあるべき姿など多様な側面の意識について聞いている。一九九九年から調査をはじめ、今回で六回目(一九九九年、二〇〇〇年、二〇〇一年、二〇〇四年、二〇〇七年、二〇一一年/今回)。

日本型雇用慣行の評価

まず、日本型雇用慣行を構成する「終身雇用」「年功賃金」「組織との一体感」について、それぞれ、どのくらいの支持割合(「良いことだと思う」)「どちら

かといえば良いことだと思う」の合計(以下同じ)があるのか見てみよう。「終身雇用」(一つの企業に定年まで勤める日本的な終身雇用)を支持する割合は、調査初回の一九九九年に七二・三％と七割を超えており、二〇〇〇年には七七・五％にアップしたものの、二〇〇一年(七六・一％)に一度若干低下してから再び上昇に転じ、二〇一一年(今回調査)では八七・五％と高い支持率となった。「組織との一体感」(会社や職場への一体感を持つこと)についても、二〇〇四年(七七・八％)に若干低下した後、上昇を続け、今回調査では八八・一％と約九割の支持率を示している。賃金に関する項目でも、「年功賃金」(勤続年数とともに給与が増えていく日本的な年功賃金)を支持する割合が、調査開始以来一貫して上昇を続けており、今回調査では七四・五％。調査を開始した一九九九年以降、いわゆる日本型雇用慣行をあらわす項目に対する支持割合が上昇している(図表1)。

図表1 日本型雇用慣行の支持割合



※終身雇用、組織との一体感、年功賃金：「良いことだと思う」「どちらかといえば良いことだと思う」の合計

え、差が五ポイント程度に収まっており、年齢階層で大きな違いがあるわけではない(二〇一一年調査)。時系列に年齢階層別の割合をみると、前々回(二〇〇四年調査)までは、年代が上がるに従って、「終身雇用」を支持する割合は高まる傾向にあったが、前回(二〇〇七年調査)で、二〇歳代、三〇歳代の若年層で「終身雇用」を支持する割合がともに一〇ポイント以上伸びて、すべての階層で八割を超え、年齢階層別の差は急激に小さくなった。今回調査では、さらに年齢階層別の差が縮まっている(図表2)。

「年功賃金」を支持する割合について、年齢階層別にみると、二〇歳代、三〇歳代の若年層(それぞれ、七四・五％、七三・一％)と比べて、六〇歳以上(六〇歳代七五・五％、七〇歳以上八〇・二％)の割合がわずかに高くなっているが、年齢階層が上がるに従って、支持割合が高まるという明確な関係はみられない(二〇一一年調査)。これを時系列でみると、「終身雇用」と同様に、前々回調査(二〇〇四年)までは、年代が上がるに従って「年功賃金」の支持割合が高まっているが、前回調査(二〇〇七年)で、二〇歳代の支持割合が約二〇ポイントと大きく伸び、また今

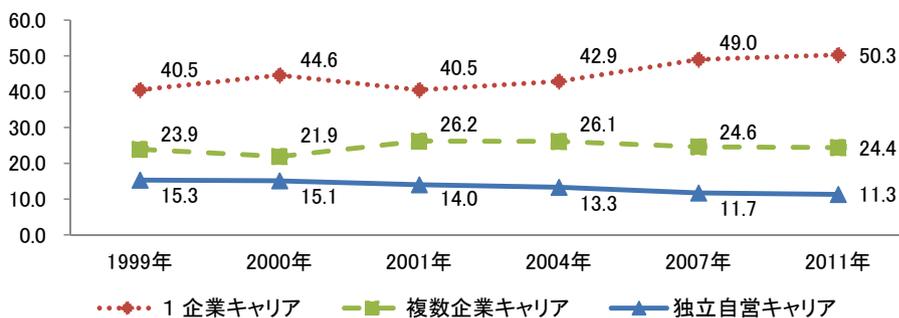
図表2

終身雇用 (%)						
調査年	1999年	2000年	2001年	2004年	2007年	2011年
全体	72.3	77.5	76.1	78.0	86.1	87.5
20-29歳	67.0	73.5	64.0	65.3	81.1	84.6
30-39歳	69.1	72.0	72.6	72.1	85.9	86.4
40-49歳	70.8	77.3	74.6	76.9	86.5	87.8
50-59歳	71.0	77.1	78.9	80.0	86.0	85.2
60-69歳	75.4	80.1	78.4	82.6	86.5	89.8
70歳以上	83.2	84.0	85.0	85.4	87.7	88.7

図表3

年功賃金 (%)						
調査年	1999年	2000年	2001年	2004年	2007年	2011年
全体	60.8	61.8	62.3	66.7	71.9	74.5
20-29歳	56.2	54.5	54.1	56.1	75.5	74.5
30-39歳	56.8	57.7	55.8	62.3	63.8	73.1
40-49歳	55.3	58.2	61.5	66.4	68.2	70.2
50-59歳	60.2	61.3	61.8	67.4	72.0	73.0
60-69歳	66.9	67.9	67.4	69.5	72.4	75.5
70歳以上	73.0	70.1	72.0	74.5	79.1	80.2

図表4 望ましいキャリア形成



※1企業キャリア：「1つの企業に長く勤め、だんだん管理的な地位になっていくコース」「1つの企業に長く勤め、ある仕事の専門家になるコース」の合計
 複数企業キャリア：「いくつかの企業を経験して、だんだん管理的な地位になっていくコース」「いくつかの企業を経験して、ある仕事の専門家になるコース」の合計
 独立自営キャリア：「最初は雇われて働き、後に独立して仕事をするコース」「最初から独立して仕事をするコース」の合計

図表5

1企業キャリア (%)						
調査年	1999年	2000年	2001年	2004年	2007年	2011年
全体	40.5	44.6	40.5	42.9	49.0	50.3
20-29歳	36.6	44.1	38.9	33.9	40.3	51.1
30-39歳	42.6	40.1	34.9	41.0	45.1	46.7
40-49歳	38.7	40.6	37.2	36.6	50.9	48.0
50-59歳	40.1	41.6	40.4	45.2	48.9	49.7
60-69歳	42.3	48.9	48.4	45.9	49.6	52.1
70歳以上	43.1	53.0	41.8	51.2	53.9	53.4

「最初から独立して仕事をするコース」の割合は調査開始以来、下降傾向を示しており、今回調査では約一割（一一・三％）となっている（図表4）。
 「1企業キャリア」を選択した割合について、年齢階層別に時系列でみると、前回調査（二〇〇七年）までは、若年層よりも六〇歳以上の高齢者で「1企業キャリア」の割合が若干高い傾向がみられる。しかし前回調査から、二〇歳代で「1企業キャリア」を志向する割合が大きく伸び、今回調査（二〇一一年）では一〇ポイント以上

回調査（二〇一一年）では、三〇歳代で約一〇ポイント伸びて、年齢階層に関わりなく、七〇八割の高い支持割合となった（図表3）。

キャリア形成についての意識

望ましい職業キャリアを一つ選択する間では、「1企業キャリア」「一つの企業に長く勤め、だんだん管理的な地位になっていくコース」「一つの企業に長く勤め、ある仕事の専門家になるコ

ース」の合計）の割合が一九九九年の調査開始以来、一貫して高く、ゆるやかな上昇傾向を示しており、今回調査では五〇・三％と過半数に達している。次いで、「複数企業キャリア」「いくつかの企業を経験して、だんだん管理的な地位になっていくコース」「いくつか

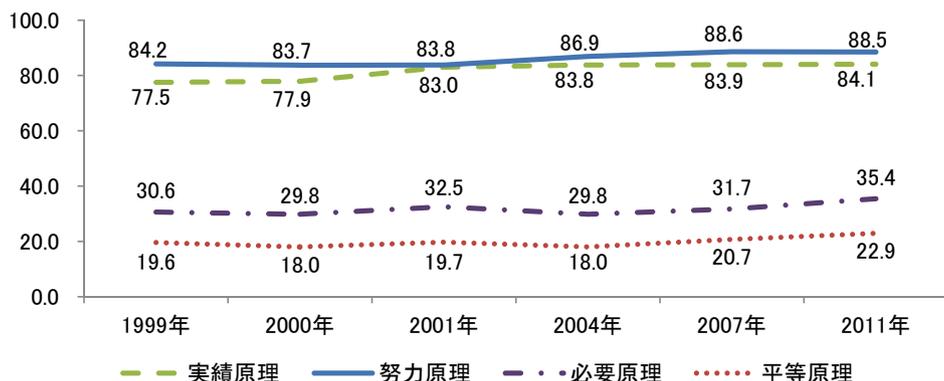
の企業を経験して、ある仕事の専門家になるコース」の合計）が二四・四％となっており、一九九九年からほぼ横ばいで推移しているが、二〇〇一年からわずかに低下傾向が出ている。「独立自営キャリア」（最初は雇われて働き、後に独立して仕事をするコース）

図表6

調査年	複数企業キャリア (%)					
	1999年	2000年	2001年	2004年	2007年	2011年
全体	23.9	21.9	26.2	26.1	24.6	24.4
20-29歳	33.5	29.9	36.6	35.4	42.9	28.2
30-39歳	31.5	30.4	37.4	35.7	32.8	33.9
40-49歳	26.8	27.0	30.3	33.4	28.4	27.6
50-59歳	21.3	22.9	22.9	24.4	22.7	28.8
60-69歳	18.0	14.9	19.7	20.0	21.8	20.4
70歳以上	10.2	7.3	12.7	11.4	11.8	12.2

上のアップとなっているのが大きな特徴で、六〇歳以上の高齢者とならぶ高水準となっている（図表5）。
一方、「複数企業キャリア」を選んだ割合は、前回調査（二〇〇七年）まで、「一企業キャリア」とは逆に、年齢階層が若いほど高い傾向を示している。

図表7 分配原理



しかし、今回調査（二〇一一年）では、二〇歳代で「複数企業キャリア」の選択割合が約一五ポイントと大きくダウンしているのがめだち、若いほど「複数企業キャリア」志向という色彩が薄まっている。
全体的にみて、年齢階層が上がるほど「一企業キャリア」志向の割合が高まり、「複数企業キャリア」志向の割合が低くなる基調は調査開始以来変わら

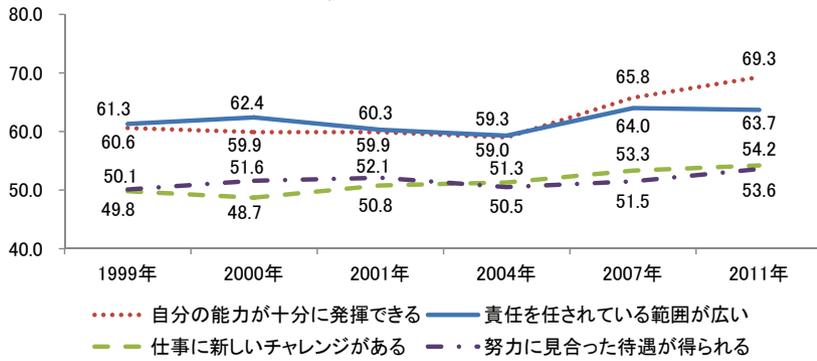
ないものの、二〇歳代で「複数企業キャリア」ではなく「一企業キャリア」を志向する割合が急激に高まっている（図表6）。
望ましい分配原理
どのような人が社会的地位や経済的豊かさを得るのが望ましいかという分配の原理について聞いたところ、「努力原理」「努力した人ほど多く得るのが望ましい」と「実績原理」（実績をあげた人ほど多く得るのが望ましい）を支持する割合（「そう思う」「まあそう思う」の合計、以下同じ）が一貫して八割前後と高水準で推移しており、今回調査ではそれぞれ、八八・五％、八四・一％となっている。「必要原理」（必要としている人が必要なだけ得るのが望ましい）の支持割合は三割前後で推移し、「平等原理」（誰でも同じくらいに得るのが望ましい）を支持する割合は二割前後で推移しており、ともに相対的に低い割合となっているものの、二〇〇四年以降ではわずかに上昇傾向がみられる（図表7）。
「実績原理」の支持割合について、年齢階層別にみると、調査開始以来、ほぼ年齢階層が若いほど、「実績原理」の支持割合が高くなっている。一方、「努力原理」の支持割合をみると、二〇〇〇年調査までは、年齢階層が高い方で支持割合が高い傾向を示していたが、二〇〇一年、二〇〇四年調査では年齢階層による違いがあまり見られず、二〇〇七年調査からは、五〇歳代以降の高支持率は変わらないものの、若い年齢階層で「努力原理」の支持割合が

高まっているのがめだち。
二〇歳代に絞ってみると、前回調査（二〇〇七年）では、「実績原理」の支持率は九二・三％で、「努力原理」は九〇・三％だったのに対して、今回調査では、「実績原理」が八七・八％で、「努力原理」が九二・六％と、支持割合が逆転している。
「必要原理」の支持割合について、年齢階層別にみると、二〇〇四年調査までは、年齢階層の高い方が数ポイント高い程度で、年齢階層による違いがほぼないが、二〇〇七年調査から二〇歳代の支持割合の伸びが大きく、二〇〇七年、二〇一一年と続けて、各年齢階層でもっとも高い支持率を示している。
「平等原理」の支持割合について、年齢階層別にみると、調査開始以来、六〇歳代、七〇歳以上の高齢者での支持割合が他の年齢階層に比べて高い水準で推移している。他の若年・壮年階層の支持率も徐々に高くなっており、今回調査では、二〇歳代が若年・壮年層のなかでもっとも支持割合が高くなった。
二〇歳代に焦点を当ててみると、変わらず「実績原理」に対する支持は強いものの、やや陰りがみられ、「努力原理」に軸足が移っている様子が見られる結果となった。また、「必要原理」「平等原理」といった、比較的年齢の高い方が支持率が高いと思われる原理についても、二〇歳代を中心に若年層の支持割合が高くなっているのが特徴的だ。

仕事満足度

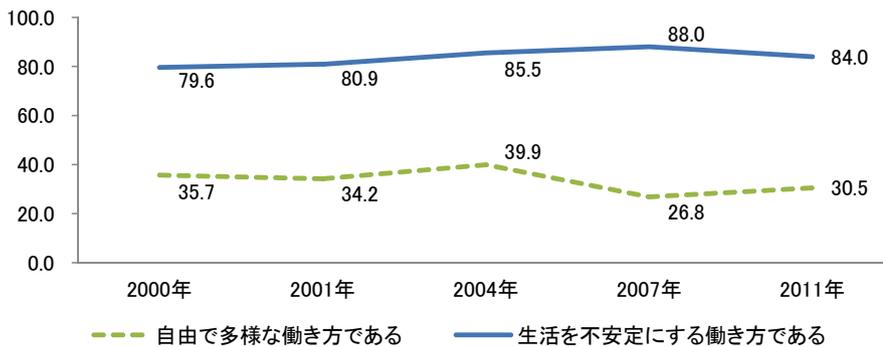
待遇や能力発揮、責任権限などの項目それぞれについて満足度を聞いたところ、満足している割合（満足している「まあ満足している」の合計、以下同じ）がもっとも高いのは「自分の能力が十分に発揮できる」ことの六九・三％で、次いで「責任を任されている範囲が広い」（六三・七％）、「仕事に新しいチャレンジがある」（五四・二％）、「努力に見合った待遇が得られる」（五

図表8 仕事満足度



※「満足している」「まあ満足している」の合計

図表9 フリーター観



※「そう思う」「まあそう思う」の合計（この項目については、2000年調査から継続調査している）

三・六％）の順。「自分の能力が十分に発揮できる」については二〇〇四年以降、上昇傾向を示し、今回調査では七割に迫っている。一方、「努力に見合った待遇が得られる」や「仕事に新しいチャレンジがある」は、五割前後で「自分の能力が十分に発揮できる」ことに満足している人を年齢階層別にみると、前回調査（二〇〇七年）までは、ほぼ年齢階層が上がるに従って満足度の割合が高くなっていったが、今回調

いわれるフリーターについて、どのような働き方と考えているのか聞いたところ、「生活を不安定にする働き方である」と考える割合（「そう思う」「まあそう思う」の合計、以下同じ）が八割を超え（八四・〇％）、「自由で多様な働き方である」とする割合（三〇・五％）を大きく上回っている。調査開始以降の動きをみると、「生活を不安定にする働き方である」が八割前後で推

フリーター観

査では、二〇歳代の伸びが大きく、調査開始以来、高水準を維持している六〇歳以上の層と同じ七割台を示しているのが大きな特徴だ。「責任を任されている範囲が広い」ことに満足している人についても、ほぼ同じ傾向で、前回調査まで、年齢階層が上がるに従って、満足度の割合が高くなっていったが、今回調査で、二〇歳代の伸びが大きく、六〇歳以上の高齢層と同じレベルを示しているのがめだつ。「仕事に新しいチャレンジがある」については、二〇〇四年調査まで、年齢階層による違いがあまり見られなかったが、前回調査で、若年・壮年層の満足度の割合が中高年・高齢者層に比べて、若干高くなっており、今回調査では、二〇歳代の満足度の割合が他の年齢階層を一〇ポイントほど引き離して高くなっている。「努力に見合った待遇が得られる」については、六〇歳代、七〇歳以上で満足度の割合が高く、その他の若年や中高年では、満足の割合が低くなっており、この傾向は、時系列的に見ても、ほぼ同様の形となっている。

移し、三割前後の「自由で多様な働き方である」を一貫して大きく上回っている（図表9）。

これを、年齢階層別にみると、「自由で多様な働き方である」と考える人は、二〇歳代、三〇歳代に多く、今回調査では、それぞれ四七・三％、三八・三％で、他の年齢階層はすべて二割台にとどまっている。時系列的に見ると、調査開始以来、おおむね年齢階層が若いほど「自由で多様な働き方である」とする割合が高い傾向に変わりはない。しかし、細かく見ると二〇歳代では二〇〇七年の前回調査（四九・〇％）より若干低い四七・三％となっており、他のすべての階層が数ポイント上積みしたのと比べて対照的な形になっている。

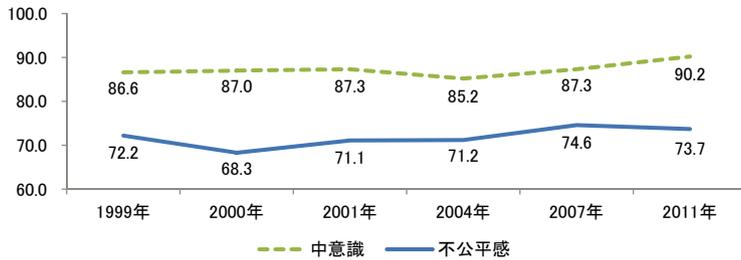
階層意識・社会意識

自分が日本の社会階層でどの階層に入ると思うか聞いたところ、調査開始以来一貫して、約九割と高い割合の人が自分は「中」（中の上）「中の中」「中の下」の合計）の階層に属すると回答しており、今回調査では九〇・二％となっている。また、社会的公平については、「不公平感」（公平でない）「あまり公平でない」の合計）を感じる割合が、調査開始以来、七割前後で推移しており、今回調査では七三・七％となっている（図表10）。

一方、「生活を不安定にする働き方である」と考える割合は、調査開始以来、どの年齢階層でも七〜八割の高い水準で、二〇歳代、三〇歳代で他の年齢階層より若干支持割合が低くなっている傾向も同様となっている。

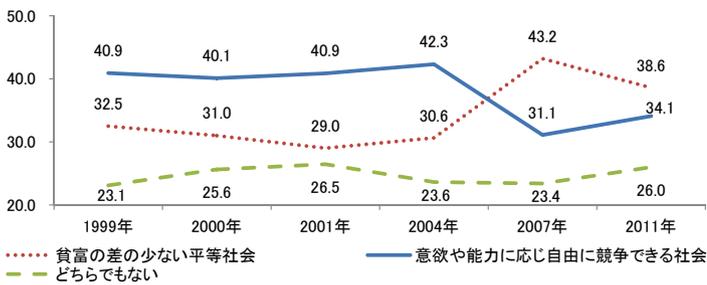
調査開始以来、おおむね年齢階層が若いほど「自由で多様な働き方である」とする割合が高い傾向に変わりはない。しかし、細かく見ると二〇歳代では二〇〇七年の前回調査（四九・〇％）より若干低い四七・三％となっており、他のすべての階層が数ポイント上積みしたのと比べて対照的な形になっている。

図表10 社会意識

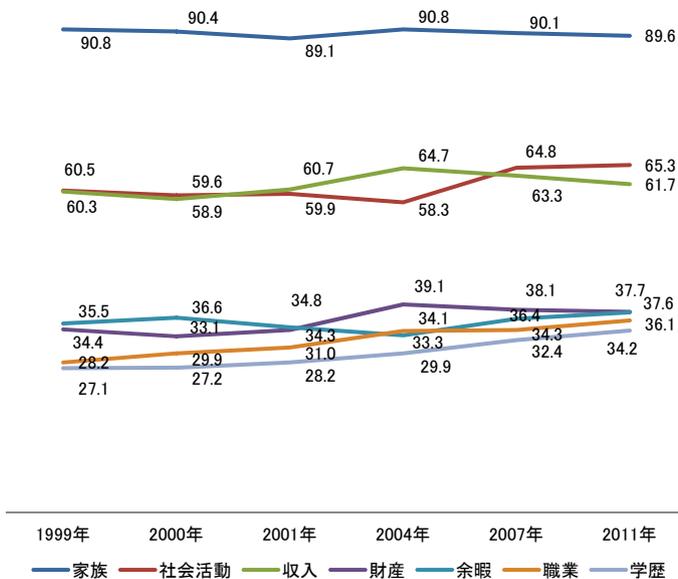


※中意識：「中の上」「中の中」「中の下」の合計
 不公平感：「公平でない」「あまり公平でない」の合計

図表11 日本が目指すべき社会



図表12 生活で何を重視するか



階層意識について、年齢階層別にみると、「中」流だと考える人が年齢階層にかかわらず八〜九割の高水準となっている。ただ、細かくみると、二〇歳代、三〇歳代の若年者と七〇歳以上の高齢者の割合が八割台で、四〇歳代、五〇歳代、六〇歳代の中高年・高齢者は九割台となっており、わずかではあるが年齢階層による違いがみられる。

社会的「不公平感」については、七〇歳以上で、不公平感を感じている人が若干少ないほかは、あまり年齢階層による違いはみられない。時系列的にみると、二〇歳代から五〇歳代の若年・中高年では、調査を始めてから一貫して、不公平感を感じている割合が高水

準で推移しているが、六〇歳代、七〇歳以上の高齢層は、調査開始から徐々に割合が上昇してきているのが特徴となっている。

日本がめざすべき社会

これからの日本がめざすべき社会のあり方について聞いたところ、「貧富の差の少ない平等社会」を選ぶ割合が三八・六％で、「意欲や能力に応じ自由に競争できる社会」の三四・一％を上回った。調査開始以来の推移をみると、二〇〇四年までは「意欲や能力に応じ自由に競争できる社会」を選択する割合が「貧富の差の少ない平等社会」を一

〇ポイントほど上回っていたが、前回調査（二〇〇七年）で一〇ポイント以上の差で逆転し、今回調査では順位はそのままで差が縮まっている（図表11）。

「貧富の差の少ない平等社会」を支持する割合を年齢階層別にみると、二〇歳代、三〇歳代、四〇歳代の若年・壮年の支持率は三割台（それぞれ、三一・九％、三五・〇％、三四・六％）で、中高年・高齢者の五〇歳代、六〇歳代、七〇歳以上の支持率は四割台（それぞれ、四三・一％、四一・一％、四一・二％）となっており、年齢階層による違いがみられる。時系列でも、水準の変動はあるが、若年・壮年層と中高年・高齢者に違いがみられる傾向

に変わりはない。これを、男女別で見ると、男性で「平等社会」を支持する人は三四・七％で、女性では四一・八％となっており、性別による考え方の違いが大きいことがわかる。

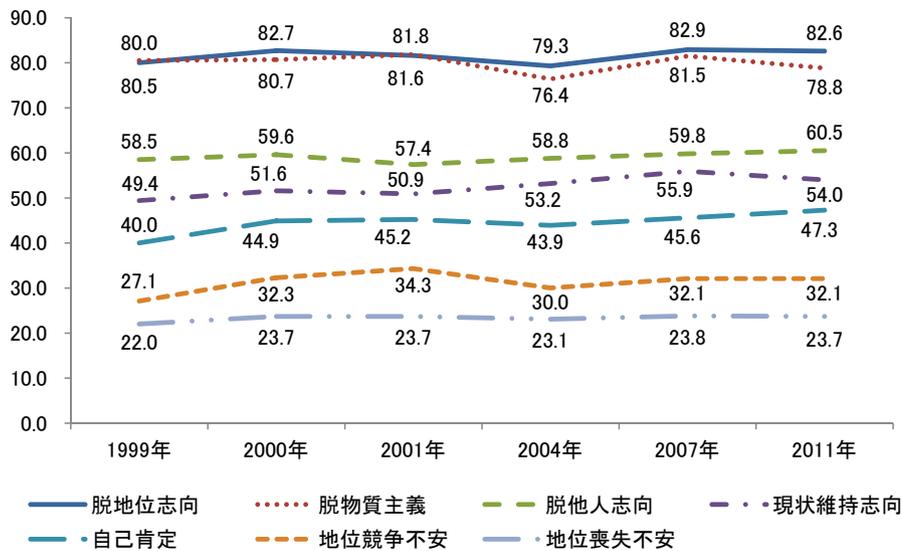
「意欲や能力に応じ自由に競争できる社会」を支持する割合を年齢階層別にみると、ほぼ年齢階層が若いほど、支持割合が高くなっており、二〇歳代では四八・九％と半数近くが支持している。時系列的にみても、おおむねこの傾向を示している。男女の支持率の違いが大きく、男性で「競争社会」を支持するのは四一・七％と高い水準で、女性の支持割合の二七・七％を大きく上回っている。

生活で何を重視するか

仕事、収入、学歴、家族、社会活動、余暇、財産について、生活の中でどの程度重視するかも聞いている（それぞれ「社会的評価の高い職業につくこと」「高い収入を得ること」「高い学歴を得ること」「家族から信頼と尊敬を得ること」「ボランティア活動、町内会活動など社会活動で力を発揮すること」「趣味やレジャーなどのサークルで中心的役割を担うこと」「多くの財産を所有すること」の各項目について、重要度を聞いている）。

各項目でもっとも重視する人の割合（「重要である」「やや重要である」の合計、以下同じ）が高かったのは、「家族から信頼と尊敬を得ること」で八九・六％。次いで、「ボランティア活動、町内会活動など社会活動で力を発揮すること」が六五・三％、「高い収入を得る

図表13 生活意識



※脱地位志向：もっと多くの富や地位を求めてがんばるよりも、自分の納得のいく生活を送りたい
 脱物質主義：これからは物質的な豊かさよりも、心の豊かさやゆとりある生活をするに重きをおきたいと思う
 脱他人志向：他人が自分と異なった考えや生活様式を持っていることが気にならない
 現状維持志向：もっと多くを手にするよりも、これまでに獲得したものを維持することの方が重要である
 自己肯定：自分には、仕事以外で他人に誇れるものがある
 地位競争不安：まごまごしていると、他人に追い越されそうな不安を感じる
 地位喪失不安：うかうかしていると、自分がこれまでに獲得したものを失ってしまいそうな不安を感じる
 ※「よく当てはまる」「やや当てはまる」の合計

こと」が六一・七%と続き、そのほか「多くの財産を所有すること」(三七・七%)、「趣味やレジャーなどのサークルで中心的役割を担うこと」(三七・六%)、「社会的評価の高い職業につくこと」(三六・一%)、「高い学歴を得ること」(三四・二%)の順となっている(図表12)。

もっとも重視する人の割合が高かった「家族の信頼と尊敬を得ること」(八九・六%)は、調査を始めてから一貫して約九割の水準を示している。これを年齢階層別にみても、大きな違いはないが、細かくみると三〇歳代から五〇歳代で重視する割合が若干高くなっている。「ボランティア活動、町内会活動など社会活動で力を発揮すること」を重視する割合(六五・三%)は、調査を始めてからもっとも高い割合となった。時系列に年齢階層別でみると、四〇歳代、五〇歳代で「社会活動」を重視する割合が高い傾向が続いている。「高い収入を得ること」を重視する

人の割合(六一・七%)は、調査をはじめから水準に大きな変化はみられない。年齢階層別にみると、年齢階層が若くなるほど重視する割合が高い。時系列的にみても、おおむねこの傾向は同じ形だ。「多くの財産を所有すること」を重視する割合(三七・七%)は、年齢階層別にみると、おおむね若いほど重視する割合が高くなっており、時系列的にみても、この傾向は変わらない。「趣味やレジャーなどのサークルで中心的役割を担うこと」を重視する割合(三七・六%)は、調査を始めてからほぼ同じ水準で推移している。時系列で年齢階層別にみると、前回調査(二〇〇七年)までは、二〇歳代、三〇歳代の若年層で、他の階層に比べ「趣味」を重視する割合が高い傾向がみられたが、今回調査では、年齢階層による違いはみられなくなっている。

「社会的評価の高い職業につくこと」を重視する割合(三六・一%)は、調査を始めてからもっとも高い割合を示している。年齢階層別にみると、七〇歳以上で重視する割合が高いのを除いては、年齢階層が低いほど「社会的評価の高い職業につくこと」を重視する割合が高くなっている。「高い学歴を得ること」を重視する割合(三四・二%)は、調査を始めてから徐々に上昇しており、今回調査まで一二年間で七・一ポイント高くなっている。大まかに言って若いほど「学歴」を重視していない傾向となっている。

生活意識

生活意識については、「脱地位志向」(もっと多くの富や地位を求めてがんばるよりも、自分の納得のいく生活を送りたい)、「脱物質主義」(これからは物質的な豊かさよりも、心の豊かさやゆとりある生活をするに重きをおきたいと思う)を支持する割合(「よく当てはまる」「やや当てはまる」の合計)が約八割と高水準(それぞれ、八二・六%、七八・八%)を示しており、調査開始以来ともに八割前後で推移している。次いで支持割合が高かったのが「脱他人志向」(他人が自分と異なった考えや生活様式を持っていることが気にならない)で六〇・五%。六割前後のほぼ横ばいで推移している。「現状維持志向」(もっと多くを手にするよりも、これまでに獲得したものを維持することの方が重要である)を支持する割合は五四・〇%で、五割前後で推移している。

「自己肯定」(自分には、仕事以外で他人に誇れるものがある)については、調査開始以来四割前半で推移しており、今回調査では四七・三%と若干上昇傾向を示している。「地位競争不安」(まごまごしていると、他人に追い越されそうな不安を感じる)が当てはまるという割合は、三割前半で推移し、今回は三二・一%。「地位喪失不安」(うかうかしていると、自分がこれまでに獲得したものを失ってしまいそうな不安を感じる)については、二割前半の横ばいで推移し、今回調査で二三・七%となっている(図表13)。

(調査・解析部主任調査員 郡司正人)